

極楽蜻蛉一家の贈り物

加藤幸子



極楽蜻蛉一家の贈り物

加藤幸子

ごくらくせいれいいつ か おく もの
極楽蜻蛉一家の贈り物

1990年11月30日第1刷発行

著者＝加藤幸子

© Yukiko Kato 1990, Printed in Japan

発行者＝野間佐和子

発行所＝株式会社講談社 東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112 電話 03-945-1111 (大代表)

印刷所＝株式会社精興社 製本所＝株式会社大進堂

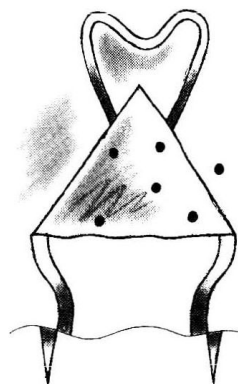
定価＝1,300 円 (本体 1,262 円)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN 4-06-204770-5 (文 1)

目次

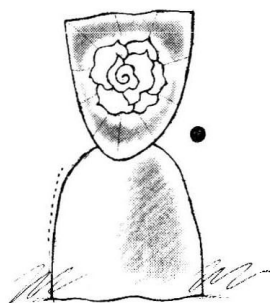
極楽蜻蛉一家の贈り物	5
極楽蜻蛉一家の温泉旅行	41
極楽蜻蛉一家の春の序曲	79
極楽蜻蛉一家のタイ印	117
極楽蜻蛉一家の森の生活	151
極楽蜻蛉一家の冬景色	203



装幀・カットⅡ木村きつこ

極楽蜻蛉一家の贈り物

極楽蜻蛉一家の贈り物



ものみなが平和すぎるために、かえってぐったりしているように見える六月の宵であった。生ま暖く湿めった風を頬に受けながら、私はワープロの前に座って、スパイ小説の最終章を翻訳していた。小説は、世界各国から集まった十人のスパイが入り乱れて次々に射殺されていくという筋だった。現在、最後のスパイが、最後から二番目の女スパイと抱擁するシーンだった。あと五ページほどで、小説の幕は閉じるはずだった。明日は目を血走らせた編集者が取りたてにくることになっているが、それにはゆうゆうと間にあって、私は面目を施すことになるだろう。

開いた窓の外には、今にも一雨来そうな夜空が広がり、坂の下にファミリー・レストランの電光板があかあかと輝いているのが見えた。隣室では大学生の次女が、ギターを爪弾

いて小声で歌っていた。

一九六〇年代に

男はやってきたアアア

透視術にたけていなくとも、私は壁越しに彼女の姿を胸に描くことができた。やはり外側に開いた窓の縁に、ジーンパンをはいた片膝を立て、折り曲げた腹部に楽器を抱きかかえて座っている。専攻の生物学関係の専門書や漫画の本を読むときも、彼女はそれに近い姿勢をとる。それは私に幾らか胎児のスタイルを連想させたが、実際にこの目で生きている胎児を見たわけではないのだから、いつかは拭き消される思いこみの一つにすぎないのかもしれない。

一九八〇年代に

男はいなくなったアアア

次女は詞も曲も自分で作るのだ。彼女は標準並の音感しか持ちあわせていない家族の中では、飛びぬけた才を示した。小学生時代には十倍の応募者の中から器楽クラブの団員に選ばれ、中学生時代には肺活量の大きさを見こまれて吹奏楽団でトロンボーン奏者を務め、高校生時代にはフルート吹きになりたいと個人レッスンを受けた。それゆえ受験の直前に彼女が農学部に進むと宣言したときには周囲は開いた口ではなく耳がふさがらなかつたものだ。しかし冷静に考えてみれば、事の次第は明らかであった。彼女はすでにこの世にある優れた音楽に触れるうちに、身のほどを覚つたのである。

どこに行つたか

だれも知らないイイイ

どこに行つたか

だれも気にしないイイイ

彼女の声はぎざぎざの乱杭歯を通ってくるせいか、ふつうの女の子の声よりくぐもっており、私の仕事の邪魔にはならない。彼女は何度目かのリフレインを繰り返した。

世界には

新しい歌なんてない

いつもいつも歌われるのは

古い歌ばかり

そうか、と私は気がついた。私がファミリー・レストランの毒々しい看板にさほど腹がたたないのは、こういうわけだったのか……。

二人の子供が近所の小学校に通っていたころ、〈D〉の店が建っている場所は、この古い町の大土地所有者である植木屋の苗圃であった。といっても長いあいだ買手がつかぬまま放置された苗は、みごとな樹林を形成し、私は居ながらにして冬どきの雪景色や梅桃桜に

山茶花、椿の花見を楽しんだものだった。ところがある日町内の酒屋が注文を取りに来て、植木屋の老主人が死に、跡継ぎは相続税の払いに四苦八苦しているという話をしてくれた。酒屋は自分の家も借地なので地代が上がるのではないかと心配していた。

その話を裏づけるように、まもなく鮮黄色に塗られたシヨベルカーが行進してきて樹木を根こそぎに倒し、傾斜地を平らにならしてしまった。

「さよなら」と私はそのときばかりは家を出て坂を下り、大型トラックの荷台で収容所に向う囚人のように葉を震わせている樹木たちにつぶやいた。トラックの運転手は行く先は埋立地だと教えてくれたが、そのあと木がどう処分されるのかは知らなかった。

学校から帰ってきた子供たちは、林で隠れん坊や虫探しをしたり、笹の子を採ったりできなくなったことを口々に残念がった。

元苗圃がコンクリートで固められた上に、清潔そうな真っ白いレストランが建つと、私たちはしきりにそこへ通うようになった。自分にもよくわからない理由で、突然夕食の仕度がいやになったとき、私は右手を頭上高くあげてたずねた。

「だれか〈D〉に行きたくない人は？」

反対者が出たことは一度もなく、私は子供たちとそこはまだ足腰のしっかりしていたバツバと連れだって、ワンダーランドふうに造られた店の扉を押した。

「いらっしやいませ。へDへようこそ」

戸口のすぐ内側に立つウェイトレスたちは、曜日によって痩せていたり太っていたり、がっしりしていたり、大女だったり小女だったりしたが、声の調子だけ聞けばまるで同一人物のようによく訓練されていた。彼女たちは指定されたこと以外は決して喋らなかつたが、つねに感じのいい微笑を忘れず、料理や店内のデザインの陳腐さをそれで補っていた。

数カ月たつと、「連れだち食事」という態の私たちの行動は消滅してしまった。ファミリー・レストランのメニューを総なめにした結果、想像するだけですぐに食べ終ったような気になるからだった。

しかし中学生になった次女は、友達との団欒にこの店を使いはじめた。彼女たちは唇や舌が少くとも半日は染まっている着色料入りのアイスクリームやソーダ水を注文し、親に邪魔されぬひとときを過ごした。高校生になった長女は、夕食後に同級生の男の子から電

話がかかると、そそくさと坂道を駆けおりていって、私が玄関の鍵を締めようかと迷う直前に戻ってきた。でも家から三分とかからず、夜更よけも昼間と変わらず明るいファミリー・レストランほどたまり場や逢い引用として健全な場所はないことに気づいたので、私は彼女たちを放っておいた。〈D〉の電光板が夜空の星の観察を妨げても、それほど腹が立たなかったのはそのせいだろう。

庭で珍らしくロッキーが激しく吠えた。隣室のギターと歌が止み、次女が犬の名を呼んだ。ロッキーは黙ったが、動きまわっているらしくチャラチャラという鎖の音は続いていた。ロッキーは鴉からすのように黒い毛をふさふさと生やした雑種だった。夜になると、彼の身体は見分けがつかなくなり、二つの目玉だけがピカピカしていた。ふだんはおとなしく、犬小屋からはみ出した前肢に顎を埋めて眠っていた。鼻先にスズメが舞いおりて、食器に残った飯粒を盛んにつづいても、薄目を開いたままぼんやりしていた。ところが買物に行くときには、彼はそり犬のような力を発揮して、胴が平行四辺形に変形するほどの勢いで私とショッピングカーを引っ張った。だいたいにおいてロッキーは家族としては無難で

あったが、一点だけどうしようもない癖があった。消防車のサイレンと焼芋屋の拡声器の呼びかけに無抵抗だったことである。悲哀の塊りに尾をつけたようなロッキーの叫びが、深夜流れたりすると、私たちは寢床で手を握りしめ、魂をちぎられるように感じた。犬は遠吠えをするとき辛いのだろうか、と私は次女にたずねた。そんなことはない、犬種になわっている遠吠えという生得的行動を触発させるキーがサイレンと焼芋屋の声なのであって、ロッキーは自然にそれに従っているだけなのだから、と次女は否定した。しかしつねに傍にいる者の気持ほど、摺みにくいという原則も働くのではないだろうか。彼女の明快すぎる返答が、私には不満であった。

トントトン。隣室との境界の壁が軽くノックされた。私がノックを返さないときは、手も口も空いていない印という約束事があったが、実際には私はこれまで音を返さなかったことはない。そして今も返した。ドンドンと威勢よく。

隣室との境は、娘たちがごく幼いころに連れあいだった者の望みで仕切られた。しかし私は彼女たちの泣き声がすぐに伝わるよう、薄い板を使うように大工に頼んだ。子供の体調は、眠るときには元気いっばいでも夜半に急変することがさらに起こるだろう。